

研究所創立二十周年を迎えて

アジア・アフリカ
文化研究所所長 恩 田 彰

東洋大学アジア・アフリカ文化研究所は、本年度（一九七九年、昭和五四年）創立二十周年を迎えて、その記念行事として六月には特別講演会、シンポジウムを開いた。さらに記念紀要としての研究年報を公刊することにした。

この時にあたり、研究所の二十年の歩みを回顧してみようと思う。「研究所八年のあゆみ」については、すでに船木勝馬（研究員によって詳細に述べられている。（船木勝馬編「研究所八年のあゆみ」アジア・アフリカ文化研究所年報一九六六年度参照）そこでここでは、この資料に基づきながら、さらにその後の歩みについて述べてみようと思う。

「研究所八年のあゆみ」によると、この八年間に本研究の進むべき路線は、すでにととのってきたように思われる。その後は、その路線を走ればよかったわけであるが、しかしそこにも工夫と努力を必要とした。研究活動を発展させるには、並み並みならぬ労力の蓄積と創造力と多くの人の協力を必要としたことはいままでもない。

東洋大学アジア・アフリカ文化研究所は、一九五九年（昭和三四年）五月、大島豊学長を所長代理として設立された。当時は東洋大学アジア・アフリカ研究所といていた。その設立趣意書によれば、「アジア・アフリカの近代化を妨げる一切の障碍を克服し、新興諸民族の自主繁栄のための建設方策を探究する」という雄大な構想をもって研究活動を始めた。大学内部では、主として研究会を開いて個人の研究発表を行ない、対外的には、イスラエル、パキスタン、ガーナなどの友好親善をはかり、他の関係機関と提携して講演会などが開催された。

一九六一年（昭和三十六年）には、佐久間鼎学長が所長を兼任し、翌一九六二年（昭和三十七年）には、新しい構想によって研究所の再編がはかられた。すなわち運営委員を選出し、運営委員会によって研究所の諸問題を協議して運営を行っていくことになった。そして研究員の研究テーマを整理するために研究員カードを作成し、一九六三・六四年度（昭和三八・三九年度）には、その共通テーマを「異種文化の交流と変成」と決定し、研究所の名称を「アジア・アフリカ文化研究所」と改め、新しい研究活動の方針が決められた。すなわち「アジア・アフリカ地域の文化の諸相について、基礎的かつ総合的な研究調査を行ない、その成果を発表し、これらの地域との友好、親善をはかり、相互の繁栄に寄与する」ことを目的とし、アジア・アフリカ地域の文化および文化交流に関する研究調査や必要な資料の収集整備、および研究成果の発表を行うことが決定された。そして本学の各分野の教員が研究員となり、それぞれの立場から共通テーマについて総合研究を推進していくことになった。

一九六四年（昭和三十九年）三月、六三年度の研究報告概要が各研究員によって執筆され、歴史学・言語学・比較文学・心理学・社会学・経済学の各部門ごとに整理して公表された。このような報告書は、研究年報が発行される前年度の六五年度（昭和四〇年度）まで、毎年発行された。しかしながら、六三、六四年度は共通テーマのもとに総合研究を行うまでにはいたらなかった。

一九六五年度（昭和四〇年度）は、新任の市村其三郎所長の下に新しい研究テーマが検討され、「アジア・アフリカ地域における宗教儀礼の比較文化的研究」という総合研究テーマが決定した。これに基づいて、次の五つのグループ別の研究テーマがかかげられ、それぞれの専門に応じて研究組織がつけられ、グループごとに研究が行われるようになった。

(1) 日本における宗教儀礼の研究 (2) 中国における宗教儀礼の研究 (3) 西アジアにおける宗教儀礼の研究 (4) 宗教の構造と人間関係 (5) 宗教の行法の比較文化的研究

この時期にあたり一九六五年（昭和四〇年）に東洋大学附置研究所規則が施行され、アジア・アフリカ文化研究所も大学

附置研究所の一つとして体制をととのえ、再出発することになった。

一九六六年（昭和四一年）四月、研究所は八十周年記念館（一号館）の九階の一室に移転することになり、研究活動をさらに積極的に進めることができるようになった。六六年度には、公開講演会を開き、また研究年報を公刊し、研究成果を一般に公表することができるようになったことは注目すべきことであった。この時期から研究例会を原則として月一回開き、年間約六回は行なっている。本研究所の特色として、現地調査が重要であるが、高橋統一研究員は、一九六六年から六七年にかけて、主として東アフリカの中部ナイル・ハム系のテソ族及びカラモジョ族を中心に社会人類学的調査を行なった。

一九六七年（昭和四二年）、研究所をより積極的に運営していくため、責任体制をつくって、運営委員が仕事を分担することになった。すなわち、庶務、企画・事業、図書、経理、紀要等である。現在は、企画、編集、図書、経理、庶務の役割分担をしているが、このことは研究活動の推進に大いに役立っている。

一九六八、六九、七〇年度（昭和四三、四四、四五年度）の総合研究テーマは、「アジア・アフリカ地域における儀礼の比較文化的研究」として、宗教儀礼を含めて、ひろく儀礼を研究対象とすることにした。六九年度に「三宅島宗教儀礼調査」（千葉栄、佐藤俊雄研究員）、六九、七〇年度に「滋賀県の宮座の調査」（高橋統一研究員）また七〇年度には「邪馬台国卑弥呼の墓の調査」（市村其三郎研究所長）が行われている。

一九七一、七二年度（昭和四六、四七年度）のテーマは、共同研究として、(1)会津若松宗教儀礼・教育調査 (2)宮座の社会人類学的調査 (3)中国文化と周辺異民族文化との交流（華陽国志訳註の研究） (4)アジア・アフリカ地域における言語と文化に分かれ、各グループごとに研究が進められた。

一九七三年度（昭和四八年度）のグループ別研究テーマは、(1)宗教文化の変遷 (2)中国文化と周辺民族の交流 (3)中国文化思潮 (4)アジア・アフリカの賤民制 (5)教育・心理であったが、七四年度は、研究テーマの変更があり、第四グループは「アジア地域の宗教・言語および教育の比較文化的研究」に改められた。七三年度に「新島における宗教儀礼と教育の調

「査」(千葉栄研究所長、西村誠、佐藤俊雄研究員)が行われた。七四年度に金岡照光研究員は、ソビエト、フランス、イギリスを歴訪し、敦煌写本の調査、敦煌研究の状況の調査を行なった。

一九七五年度(昭和五十年)のグループ別研究テーマは、(1)宗教文化の変遷 (2)中国文化と周辺民族文化の交流 (3)宮座の社会人類学的調査 (4)アジア地域の宗教・言語および教育の比較文化的研究であった。七五、七六、七七年(昭和五〇、五一、五二年)には、シンポジウム「アジア地域の宗教・言語および教育の比較文化的研究のあり方」を開き、本研究所の共通テーマである比較文化的研究の問題点の追究と、その共同研究のあり方について、それぞれの研究員の報告に基づき討論を行なった。

一九七六、七七、七八、七九年度(昭和五一、五二、五三、五四年度)の主要なる研究テーマは、(1)宮座の社会人類学的研究 (2)中国文化と周辺民族文化の交流 (3)アジア地域の宗教・言語および教育の比較文化的研究である。すなわち現在本研究所の研究テーマは以上三つに分けられている。(1)の研究では、高橋統一研究員の指導の下に、滋賀県を中心として宮座の研究が行われ、その成果は関係諸学会において注目されている。また(2)の研究は、①「華陽国志」の訳注を通して中国と中国周辺諸民族交流の歴史的研究と②東洋における神話、伝説に現れた民族性の研究に分けられているが、「華陽国志」の訳注研究は、船木勝馬研究員を中心として研究が続行され、現在巻五まで公刊されており、この研究成果は、関係諸学会の研究員の注目を集め、その続刊が待望されている。(3)の研究では、①宗教の儀礼と行の比較文化的研究において「吉田神道における太元宮創立の意義(千葉栄研究員)」、「ヨーガおよび禅における瞑想の心理学的比較研究」(恩田彰)が行われている。②アジア地域における学校教育及び社会教育の地域的特性に関する比較教育的研究(倉内史郎、西村誠研究員)では、沖縄県で現地調査が行なわれた。③近代日本におけるアジア観と世界観(針生清人研究員)④アジア・アフリカ地域における文化交流では、福鎌忠恕研究員は一九七五年(昭和五十年)にフランス滞在中、二度にわたってチュニジアを訪問し、イブン・ハルドゥーンについて研究調査をした。渡辺宏研究員は、マルコ・ポーロの「東方見聞録」について、多面的に研究

を進めその成果は関係研究者の注目する所となっている。また⑤アジア地域における諸民族の言語、習俗、思考法の比較研究（森川久次郎、Moses Burg 研究員）などが行われている。

一九七七年（昭和五二年）にシンポジウム「比較文化論をめぐって」が行われた。その手がかりとして講座・比較文化（全八巻、研究社）の何れの巻（または章）について数名の研究員が通読し、これを紹介批判しながら話題を提供し、これについて活発な討議が行われた。また現代中国の少数民族について研究している谷口房男研究員は、七八年に東洋、駒沢、早稲田大学友好訪中団の一員として中国を訪問し、各地の古蹟を調査した。

これらの研究成果は、公開研究例会、シンポジウムにおいて発表され、まとまったものは、毎年公刊されている「アジア・アフリカ文化研究所研究年報」に発表されている。研究年報は、現在十三巻まで出ているが、国の内外の関係研究機関に送られ、それぞれの機関誌と交換されている。

以上研究所の二十年の歩みについて述べてきたが、この二十周年を一つの区切りとして、将来の研究活動に見通しを立てて、研究活動の発展を期したいと思う。